

多田富雄没後九年追悼能公演

新作能

# 望恨歌

マンハング (ぼうこんか)

シテ 鶺澤久

2005年「釜山国際演劇祭」で上演されて以来、十四年の歳月を経て、「多田富雄の新作能を上演する会」により、鶺澤久をシテに迎えての再演。

第二次世界大戦が始まるうとしていた一九三〇年代、朝鮮半島から強制連行されて多くの人が九州の炭鉱で死んだ。

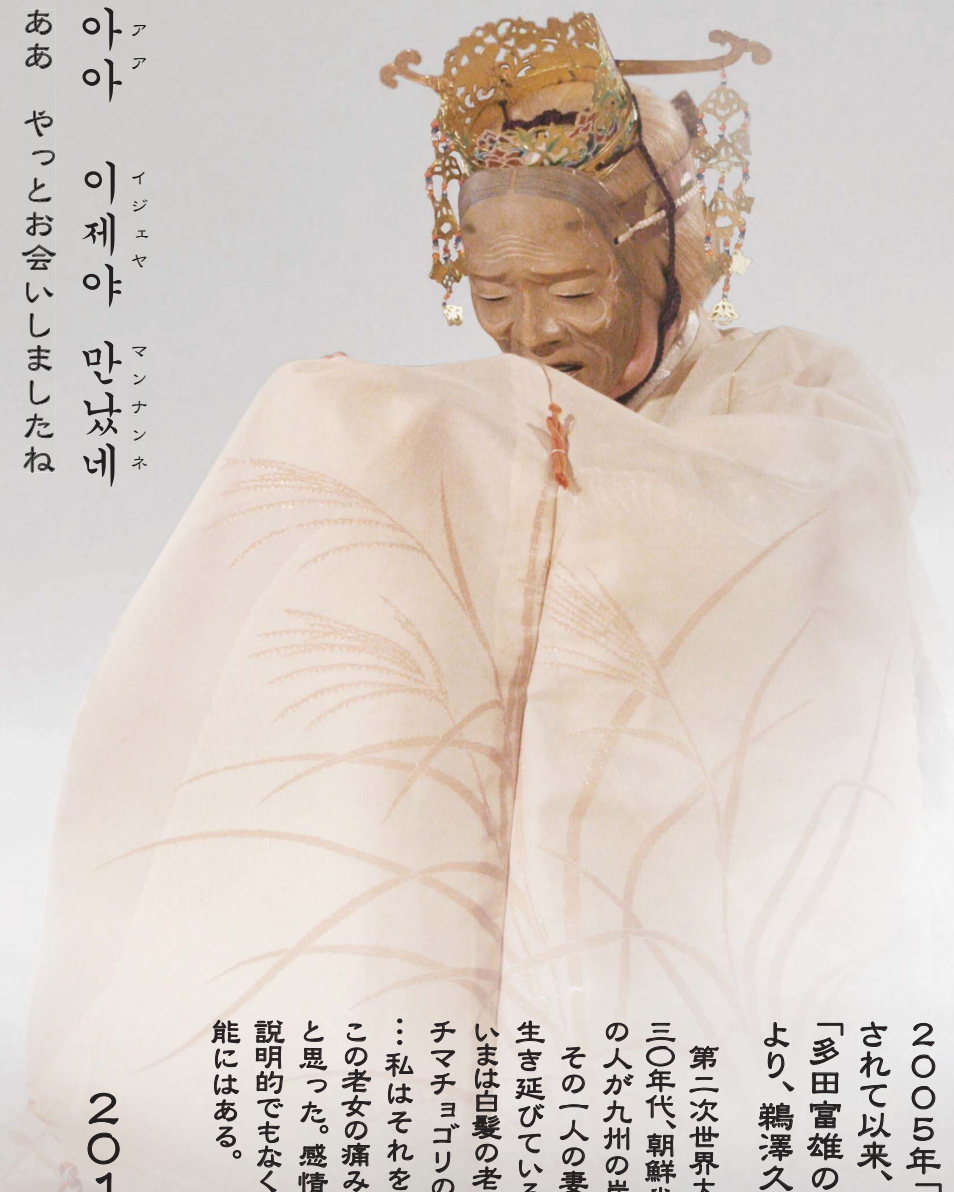
その一人の妻が、韓国の寒村でひっそりと生き延びている。当時は若妻であったのに、いまは白髪の老婆となって、腰の曲がった姿でチマチヨゴリの背に手を組んで立っていた。…私はそれを能に書こうと真剣に思った。この老女の痛みを表現できるのは能しかないと思った。感情に流されることもなく、かつ説明的でもなく、事実の重さを問いかける力が能にはある。 「創作ノート」より 多田富雄

2019年4月20日(土)

午後2時開演

於 国立能楽堂

アア  
アア  
イジエヤ  
マンナンネ  
ああ やつとお会いしましたね



免疫学の先端の研究で知られる多田富雄は能に造詣が深く、自ら小鼓の稽古もし、現代的なテーマを扱った新作能を次々と発表した。その最初が脳死・心臓移植をテーマとした『無明の井』であり、第二作が一九九三年に初演された『望恨歌』である。日本と韓国の間には、いま従軍慰安婦や強制連行をめぐって軋轢が生じている。

対立をあまり相互に非難し合うことではなく、静かに顧みて、不幸を胸に刻み、悲劇を繰り返さないために何が出来るかを考えさせる力が能にはある。韓国の民衆の歌謡「井邑詞」をこの新作能の大事なモチーフとして取り入れた『望恨歌』が上演され、加えて「井邑詞」が韓国と日本の演奏家、演出家の共同作業によって復曲される意義は大きく深い。

あらずし  
日本が韓国を植民地としていた時代。強制連行により九州の炭鉱で亡くなった夫とその残された妻の物語である。その夫の遺品とともに残された手紙が九州のお寺の僧侶により、戦後数十年たって韓国の山村に一人暮らす老婆のもとに届けられる。頑なに人との交流を避け孤独に暮らす老婆は、その手紙を読んで「アア イジエヤ マンナンネ（ああ やつとお会いしましたね）」と嘆き悲しむ。おりしも秋夕という死者の霊を慰める魂祭である。老婆はお酒を飲み、亡き夫を思い井邑詞を謡い、砧を打ち、「恨」の舞を舞う。

I部  
解説 — 韓国の「恨」の文化と新作能『望恨歌』

百済歌謡 — 井邑詞 復曲演奏

歌 ヘグム キム・ジュニ  
ピリ パク・ミウ  
テグム ミン・ヨンチ

II部  
新作能 『望恨歌』

シテ李東人の寡婦  
ワキ九州の僧  
アイ韓国の村人  
小鼓 大倉源次郎  
大鼓 大倉慶乃助  
太鼓 小寺真佐人  
笛 松田弘之  
石田幸雄  
宝生欣哉  
鶯澤久

地謡  
鶯澤 光  
坂井 音晴  
武田 馬野  
坂井 文志  
武田 浅井  
浅井 文義  
浅井 文義  
後見 真州 坂井 音雅

能本 多田 富雄  
演出 笠井 賢一  
衣装 細田 ひな子  
制作 アトリエ花習

多田富雄（1934年〜2010年）東京大学名誉教授。野口英世記念医学賞、エミール・フォン・ペーリング賞、朝日賞、小林秀雄賞など受賞。文化功労者。免疫学の先駆的な研究に加え『免疫の意味論』などの著書により免疫と自己との関係を哲学的に捉え直した。新作能の作者として臓器移植をテーマにした『無明の井』、夫を日本に強制連行され韓国に残された妻の老後を描いた『望恨歌』、アインシュタインの相対性理論と原子力を取り上げた『石仙人』、また『原爆島』をはじめとする戦争三部作など、今日的なテーマで新作能の歴史に新たな世界を加えた。現在もますますその新作能の上演が待たれている。

〈多田富雄の新作能を上演する会〉賛同人

- 大倉源次郎（大倉流小鼓宗家・重要無形文化財個人認定）
- 岡田弥生（歯科医・草の根歯科研究会）
- 笠井賢一（演出家・能楽プロデューサー）
- 関口時正（東京外国語大学名誉教授・翻訳家）
- 外村大（東京大学教授・日本近現代史）
- ソン・ヘギョン（ソウル女子大学教授・比較文学）
- 中沢けい（法政大学教授・作家）
- 藤原良雄（藤原書店社主・出版人）
- ヤドヴィガ・ロドヴィッチ（元ポーランド駐日大使・能楽研究）

2019年4月20日(土)

午後1時30分開場／午後2時開演

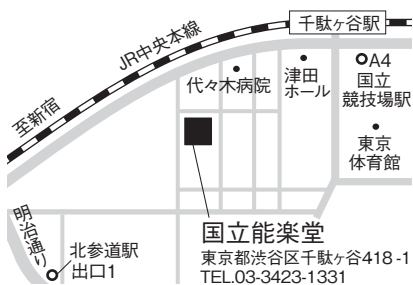
- 入場料
- S席 10,000円
  - A席 8,000円
  - B席 7,000円
  - C席 5,000円
  - 学生 各席1,000円引き

●国立能楽堂

- ・JR「千駄ヶ谷駅」徒歩5分
  - ・大江戸線「国立競技場駅」A4 徒歩5分
  - ・副都心線「北参道駅」出口1 徒歩7分
- ※駐車場はありません。

●お問い合わせ・お申し込み

多田富雄の新作能を上演する会（アトリエ花習）  
TEL 06-6676-3768  
Eメール mail@atelierkashu.com



# 『望恨歌』

## 全三回の事前講座

能と聞けば、分かりづらく、重く、敷居が高いというのがという一般的な通念ですが、能でなければ表現できない世界があります。日韓で深刻な問題になっている「徴用工—朝鮮人強制連行」がテーマの能『望恨歌』をより深く理解し、感動して頂くために、重く難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白く解きほぐし、鎮魂の芸能としての能と出会って頂くための講座です。

### 第一回 4月3日(水) 18時30分 「能と新作能」

1. 能とは
2. 能の歴史は新作能の歴史～『望恨歌』の詞章を読む

講師 鶴澤久 大倉源次郎 笠井賢一

### 第二回 4月10日(水) 18時30分 「多田富雄と新作能」

1. 詩人 多田富雄
2. 多田富雄の新作能

講師 赤坂真理 笠井賢一

### 第三回 4月17日(水) 18時30分 『望恨歌』をめぐって

1. 歴史的背景
2. 新たな一步の為に人の痛みにも立ち帰る

講師 外村大 中沢けい 笠井賢一

◎参加者の方には、『望恨歌』の詞章を差しあげます。

◎『望恨歌』(4月20日)の公演のチケットを購入された方は入場無料ですが、当日資料代実費として500円頂戴します。能公演のチケットお持ちでない方の入場料は各回1500円(資料代含む)

会場 国立能楽堂 二階 大講義室 (東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1 TEL03-3423-1331)

お申し込み・お問い合わせ TEL090-9676-3798(アトリエ花習)

◎講師プロフィール(五十音順)

**赤坂真理** 作家。代表作に『ヴァイブレーション』(廣木隆一監督、寺島しのぶ主演で映画化)『東京プリズン』(毎日出版文化賞、司馬遼太郎賞、紫式部文学賞)等多数、『多田富雄コレクション4』(藤原書店刊)に解説を書いている。

**鶴澤久** 観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。その受賞理由に「鍛え抜かれた的確な技と作品に対する鋭い感性によって、性別を超えた独自の芸境に達している」とある。今回『望恨歌』のシテを勤める。

**大倉源次郎** 小鼓大倉流十六世宗家 父大倉長十郎に師事。重要無形文化財各個認定(人間国宝)。古典の最奥の老女物から新作能まで幅広く取り組む。多田富雄新作能も多く手掛ける。観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。

**笠井賢一** 演出家・劇作家・能楽プロデューサー。鏡仙会の能楽プロデューサーを長く務める。古典と現代をつなぐ演劇活動をする。多田富雄作品の演出を多くしている。アトリエ花習主宰。

**外村大** 東京大学教授、日本近現代史。在日朝鮮人史の研究、近代日本をめぐる人の移動の研究、植民地期の朝鮮社会の研究などを課題とする。高麗大学留学。著書に岩波新書『朝鮮人強制連行』。

**中沢けい** 作家、法政大学教授。高校在学中に書いた「海を感じる時」で群像新人文学賞。著書に『野ぶどうを摘む』『女ともだち』『豆畑の星』等多数。『楽隊のうさぎ』が鈴木卓爾監督で映画化。BRC(放送と人権等権利に関する委員会)委員をつとめた。